語り合い 寄り添うつながり

陳 天璽（チェン ティエンシ）
民博 民族社会研究部

移民や無国籍者に注目している。移民や無国籍者をつうじ、国家とはなにか、国籍とはなにかについて考察している。最近は、パスポートが人びとに与える影響にも着目している。

人は交流を重ね、語り合うことで理解を深めてゆく。情報交換することで問題解消につながることもあれば、寄り添う人びとにとってはそのつながりが心の拠り所となることもある。

そんなつながりが、みんぱくの研究フォーラムをきっかけに生まれた。昨二〇〇八年一一月二三日、東京の国連大学で開催した「無国籍者からみた世界――現代社会における国籍の再検討」と題するフォーラムだ。

●無国籍の人たちの肉声が響く

フォーラムには、定員一二〇人をはるかに超える参加者が集まり、折りたたみ椅子を入れても立ち見者がいたほどで、企画者としてはまさにうれしい悲鳴であった。

このフォーラムへの関心が高かったのは、第一に時期相応なテーマだったという理由がある。婚姻関係のない日本人男性とフィリピン人女性とのあいだに生まれた子が、非嫡出子という理由で日本国籍が与えられず無国籍状態でいた。折しも昨年六月、最高裁は違憲判決を下し、日本政府としても婚外子差別をなくすべく国籍法改正に踏み切ったときであった。

参加者の関心を集めたもうひとつの理由には、当事者の語りがあった。それは会議後に集めたアンケートに、「無国籍の人の肉声が心に響いた」という感想が多数寄せられたことからもわかる。

じつは、パネリストとして自分の経験を話すことを依頼した無国籍の人のなかには、「人前には出たくありません」と断ってきた人もいる。自分の辛い経験を話すことはそう簡単なことではないからだ。しかし、企画の際、私が当事者の語りにこだわった理由は、なによりも彼ら自身が人に話すことで自分の心の奥底にあるコンプレックスや、もやもやしたものを乗り越えてほしいと思ったからだ。

●無国籍ネットワークが発足

フォーラムが終わったあと、パネリストとして参加してくださった無国籍の人たちがみな笑顔であったのが印象的だった。他人に自分の気持ちを伝えられること、そして思いを分かちあえる人と集い交流できたことに喜びを感じたのだった。これまで無国籍の人は、そんなつながりをもつことができないでいたからだ。

このフォーラムがきっかけとなり、今年一月三一日、「無国籍ネットワーク（Stateless Network）」が発足した。無国籍や国籍の問題について語り合える場、無国籍の人が寄り添える場をつくろうと有志が集まった。カフェで友人と話すように当事者が自分の経験について話す「すてねとカフェ（Stateless Network Café）」や、無国籍に関する勉強会「すてねとゼミ」、メールや電話などによる相談窓口などの活動をおこなう予定だ。

無国籍の人びとが語り合い、寄り添い、そして人びとつながりをひろげていくことができる場になればと思っている。

＊詳しくは
http://www.stateless-network.com/
をご覧ください

ドキュメンタリー『無国籍　わたしの国はどこですか』を制作したディレクターを囲んで行われた第1回「すてねとカフェ（無国籍ネットワーク・カフェ）」